

西郷は、後に流される沖永良部島では“からだ”を限界まで痛めつけられているのだが、大島の場合は罪人扱いではなく、なにがしかの俸給もあり、身体的なきつさはない。

しかし、それまでが武家集団の中でメジャーとして活躍していただけに、まるで次元の違う一流民の立場への環境の変化には、さすがの西郷も強い戸惑いを感じたようである。

精神面で言えば、後に流される沖永良部島の時より遥かに苦しかったのではあるまいか。

人は、身体よりも心の様子の悪い場合の方が耐えられないものなのだから。

入島した当時の友人に宛てた手紙が残っているが、それには、志半ばでやりかけた仕事が頓挫してしまった挫折感や、月照との心中で死に損なった武人としての情けなさ、遠島人たる自分に対する島民達の冷ややかな視線、又、とてつもない田舎に来てしまい、活躍の場を失った虚しさ等、強い焦燥感に苛まれている本音が綿々と綴られている。

しかし、生来土着性の強い西郷は、時が経つに従い少しずつ島暮らしになれてくる。

この辺りは、逆に大久保や、長州の桂等だったら耐え切れていたかどうか。

島に馴染んできた西郷は、奄美大島が薩摩藩にとって搾取の場、おいしい金蔓であることが解ってくる。

薩摩藩の島人に対する租税割り当ては、本土のそれを遥かに超えた苛酷なものであった。

彼は、自分に出来る範囲ではあったが、容赦のない年貢取り立てに苦しむ島の農民達のために機会を捕えては救済の手を差し伸べている。

いかに庶民が大変な思いをしているのかの実体に、武士の立場でなく一流民としての立場で触れた体験は大きい。

彼は、自分が維新政府の中枢に立った時、他の政府高官の贅沢三昧を強く批判したことは前にも述べたが、そうしなくては居られなかったのは、犠牲になった同志達に対する申し訳なさと共に、苛酷な生活を強いられている奄美大島の農民たちの姿が心のどこかに残っており、そのことも彼が憤った原因の一つではないだろうか。

奄美大島には、西郷の農民救済にかかる美談伝承が多数残っており、今でも当地での西郷崇拜は本土に負けないものがある。